

日本で「彫刻」という概念が生まれたのは、明治期からと言われています。その後、時代が進むにつれ、彫刻は様々な素材や手法によって制作されるようになりました。ここでは、独自の表現を追求した3人の国内作家を紹介します。

イタリアの彫刻家ファッツィーニに師事した川原竜三郎（1940-2012）は、伝統的な蠟（ろう）型鑄造[※]を学び、物語的な情景を細部まで具象的に表現しました。保田井智之（1956-）は、木やブロンズなど異なる素材を用いて、従来の彫刻の技法にとらわれない作品を制作しています。清水良治（1935-2016）は人体を何度もデッサンすることで、内面からわき出る強い感情や意志を人物の動きや姿勢に表現しました。それぞれの作家が取り組んだ現代彫刻をお楽しみください。

※蠟（ろう）で原型を作って型を取り、金属を流し込む技法

■展示作品リスト

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	大きさ(cm)	材質
1	川原 竜三郎	1940～2012	太陽と収穫	1977（昭和52）頃	49.5×58.5×32.5	ブロンズ
2	保田井 智之	1956～	a clod of earth Jul. －ひとくれの土 七月－	2008（平成20）	151.8×52.7×33.6	木, ブロンズ, 石膏
3	清水 良治	1935～2016	運ぶ人	1975（昭和50）	151.8×52.7×33.6	ブロンズ